

県立吉田病院と連携した学校での教育の概要

新潟県立吉田特別支援学校 校長 森田隆行

特別支援学校

特別支援学校(視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・病弱)

特別支援学校(知的障害)

小学校・中学校・高等学校に準ずる指導 及び 自立活動

特別支援学校(知的障害)の各教科等 及び 自立活動

障害の状態により特に必要がある場合

- 各教科及び外国語活動の目標、内容の一部を取り扱わないことができる
- 各教科の前各学年の目標、内容の全部又は一部に替えることができる
- 前学部の各教科の目標、内容の全部又は一部に替えることができる
- 中学部の外国語科は、外国語活動の目標及び内容の一部を取り入れることができる
- 幼稚部教育要領の各領域のねらい及び内容の一部を取り入れることができる

指導の形態として

- 各教科、領域等別の指導
(小)国語、算数、音楽、体育 等
- 各教科等を合わせた指導
生活単元学習、日常生活の指導 等
・生活単元学習では、広範囲に各教科等の内容が扱われ、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするため、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習

児童生徒の実態によって

前学部の各教科

- ・高等部の各教科の目標・内容→小・中学部の各教科の目標・内容の一部を替えることができる
- ・中学部の各教科の目標・内容
→小学部の各教科等の目標・内容の全部又は一部に替えることができる
- 幼稚部の教育要領の各領域のねらい・内容の一部を取り入れることができる

知的障害を併せ有する児童生徒

- (小・中学部)特別支援学校(知的障害)の各教科又は各教科の目標、内容の一部に替えることができる
- (高等部)特別支援学校(知的障害)の各教科等の履修によることができる

重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合

- 自立活動を主として指導
- * 道徳、特別活動の目標、内容の全部を替えることができない

教員を派遣して教育を行う場合

- 上記のいずれかに示すところによることができる
- 特に必要がある場合には、実情に応じた授業時数を適切に定める

- 新潟県立吉田特別支援学校
- 種別：病弱
- 入院せずに心療内科等で治療を受ける児童生徒が増加
子どもの主訴や診断名は様々、心身の不調に困っている点で共通。多くが転入前の学校（通常の学校）において、学びづらさや活動のしづらさ、不登校などを経験
- 医師等（医師、看護師、心理職）と共に、心身の不調に困っている児童生徒が安心して通い学べる学校づくりの取組を推進
 - ① 医師等との協働
 - ② 教師間の共通理解
 - ③ 個のニーズに応じた指導・支援

- 学校の学級数、児童生徒数等、職員数（令和6年9月1日）
＊ 年度途中の転入や転出により、数は年度内で±5程度で変動

① 学級数20（小3、中7、高10）

② 児童生徒数38（小6、中12、高20）
通学生34（うち重度重複障害6）、入院生0、施設入所生4

③ 職員数63
校長1、教頭1、教諭47、養護教諭1、講師5、学校看護師2、事務他6

- 学校の教育課程

①小中高等学校に概ね等しい教育課程（対象9名）

②一部、特別支援学校（知的）の教科等に変更した教育課程（対象19名）

③重度心身障害児対象の教育課程（対象10名）

- 関係する医師等

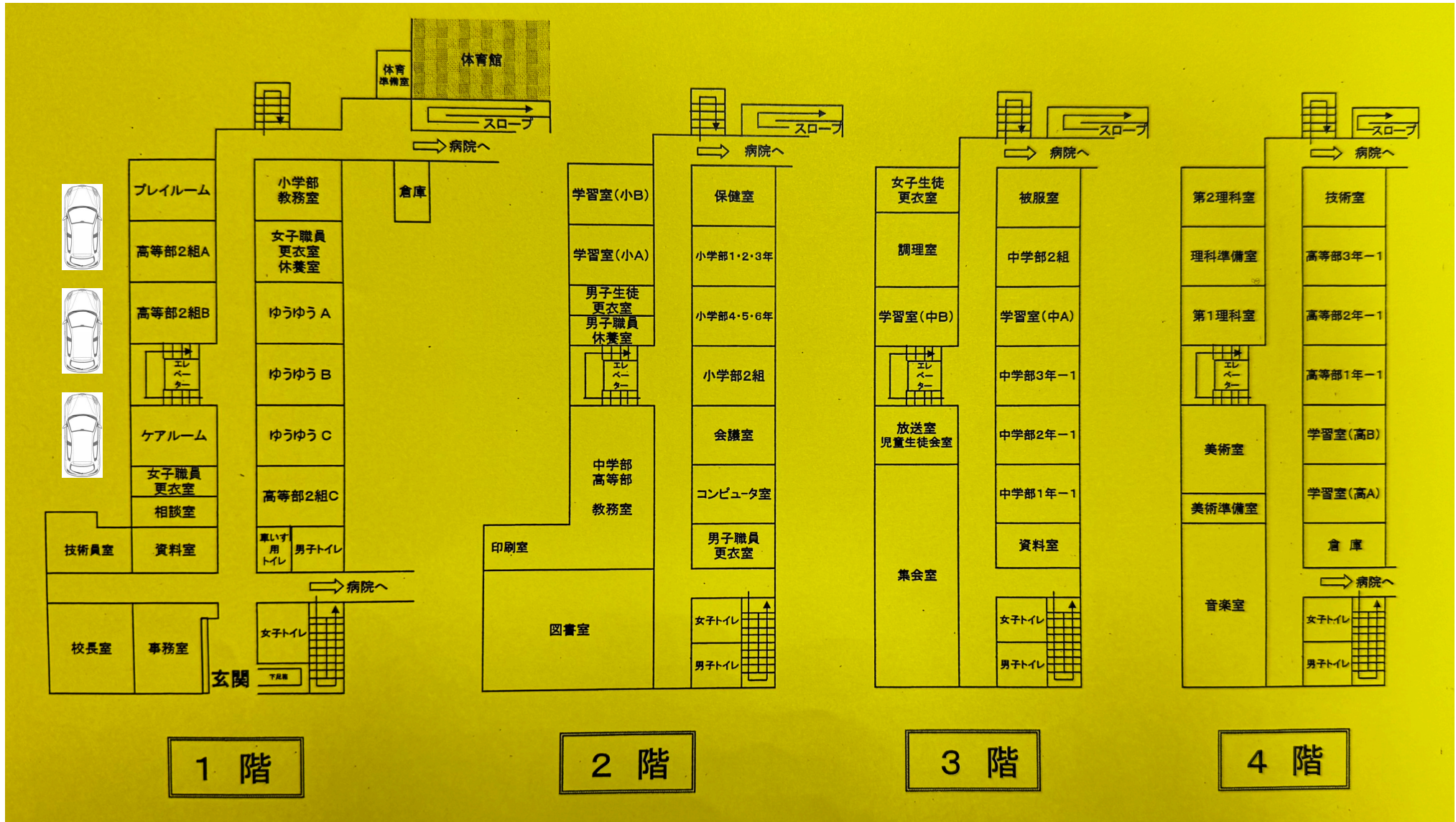
17名（医師5、看護師10、心理1、相談員1）



新潟県立
吉田特別支援学校



注意



1 階

2 階

3 階

4 階



相談室

相談室
女子職員室

高等部2組C


車いす用トイレ
このトイレは、車いすの人はもちろん、高齢者や障害のある人も利用できます。


車いすを操作する人が、このトイレを使います。



● 医師等との協働

治療と一致した教育を展開するため、様々な協働の在り方を模索

① 転入前・転出前カンファレンス

転入・転出予定の子どもについて、医師等から情報を受け、教育方針を検討

② 医師等との日常的連携（ほぼ毎日連携）

子どもの行動問題について、即時医師等に連絡する

- ・ 病院診察室から電話等で助言を得て行動問題に対応
- ・ 医師等が直接学校に足を運び教師と一緒に子どもに対応。

③ 治療と教育の在り方を検討する会議の実施（今年度現在までに24回実施）

教員が医師等と共に随時に子どもの現状を話し合い、治療と教育を検討

④ ランチタイムミーティング（隔週1回）

医師等と校長、教頭が集まり、学校と病院で共通して工夫することを検討

● 教師間の共通理解

① 子ども理解の会（学期1回）

ただし、共通理解すべきことは多数、この会だけでは教師間の共有が難しい。

② 幹部情報交換（毎日放課後15分）

- ・ 校長、教頭、学部主事等
- ・ 実施した指導・支援と子どもの様子を報告し合い共有
- ・ 望ましい指導・支援について共通理解

③ 指導・支援の具体を全職員で共有（職員朝会、毎日）

- ・ 幹部情報交換で共有した望ましい指導・支援
 - ・ 「誰が誰にどうしてどうなったか」…具体的に
 - ・ 肯定的価値付け、望ましい理由を加えて 紹介
-
- ・ 一人一人の子どもの実態、観点・考え方、指導方法と成果や効果など実際の事例を通して、毎日毎日徐々に全職員で理解している。

- 学習・生活の実態とニーズ把握、目標設定、教育支援計画作成・実行・評価・修正

- 全体で意識的に取り組んでいること

- ① 授業における学習形態の工夫（学期内であっても柔軟に変更）
個別、グループ・小集団、一斉など
（「〇〇学習」「〇〇式」からのスタートではない）

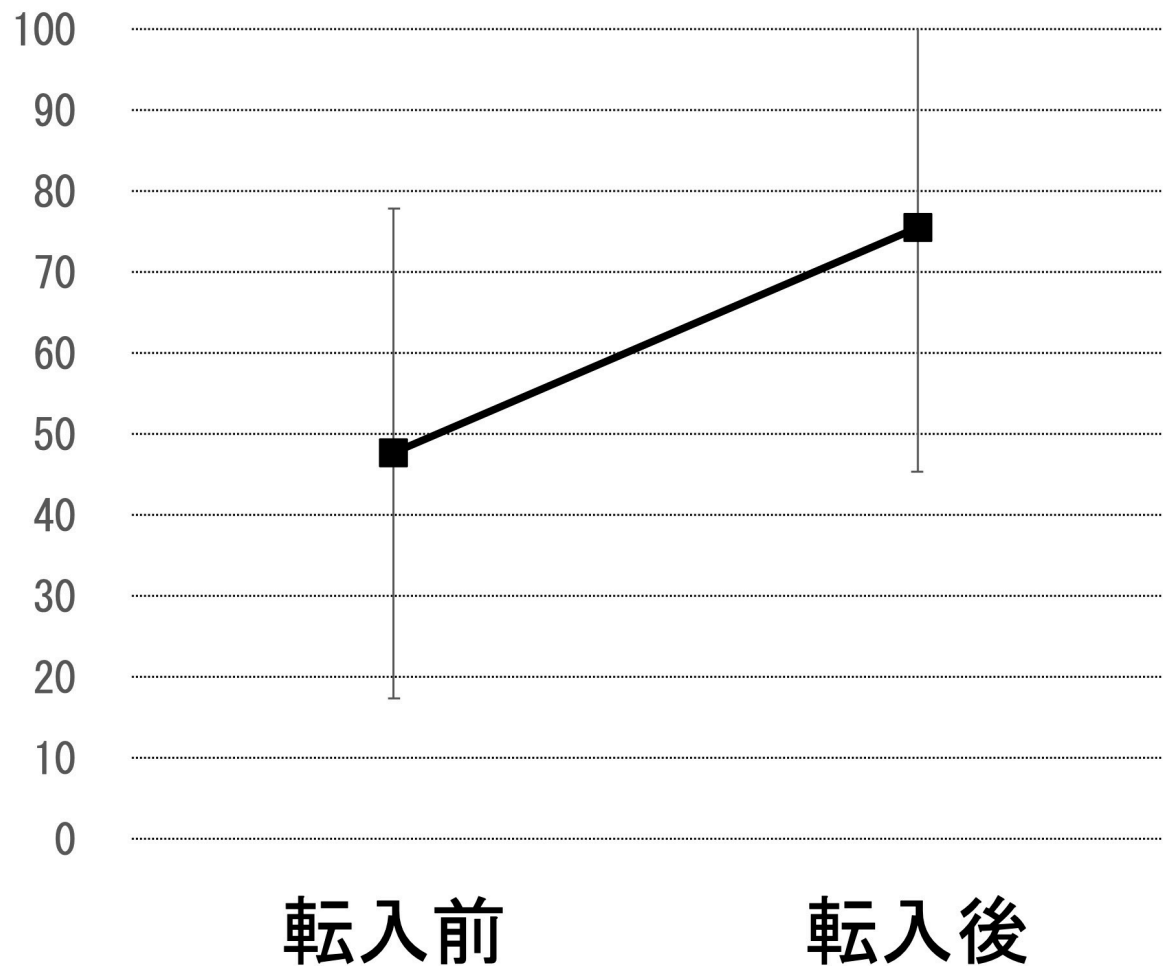
- ② 得意に焦点を当てた指導・支援
困難に寄り添う。弱みなどネガティブな側面の改善を主にしない。

- ③ 異年齢集団の活用、校外人材の活用
実態に応じ、人間関係の幅を広げる工夫

- ④ 児童生徒の活躍の場の設定
治療や教育が進行してきた子どもの有用感を高める場面設定

● 出席率の変化

- ・ 通学生のうち重度重複障害がある者を除く29名の平均
- ・ 転入前と転入後の出席率（出席日数／出席すべき日数×100、単位％）



- ・ 25名が向上（最も著しい変化は7.6%→89.5%）
- ・ 4名が低下（最も著しい変化は16.4%→5.4%）
- ・ 平均（標準偏差） 転入前47.6%（30.2） 転入後75.5%（31.1）

- 子どもが感じる学校に来ることの楽しさ（26名 個別の雑談）
「学校に来ることが楽しい」と語った児童生徒は26名中26名
 - ・ 「うるさくない。静かで自分に合っている」「静かに勉強できるから」「人が少ない」「落ち着いて勉強できる」（校舎内の静謐さ）勉強が分かる
 - ・ 「自分のことを理解してくれているから」「配慮してもらっているから」（教師から理解してもらえる）サポート認知
 - ・ 「おもしろい先生」「先生が良い」「先生と話をするのが楽しい」（教師についての肯定的印象）サポート認知
 - ・ 「大きな声を出す先生がいない」「学校に来い来いって言われないから」「きまりがあっても変更してくれる」（行動の強制や統制が少ない）
 - ・ 「友達が自分のことを分かっている。あれこれ言わない」（友達との関係が良い）サポート認知
 - ・ 「学校が明るい」「時々楽しいこと（イベント的な教育活動）がある」（学校への明るいイメージ）

2023年度「特色ある教育実践」(日本教育公務員弘済会新潟支部、新潟日報社主催)の優秀賞に、県立吉田特別支援学校(燕市)が選ばれた。同校の取り組みを紹介する。

優秀賞 吉田特別支援学校(燕)



ミーティングで話し合う、県立吉田特別支援学校と県立吉田病院の関係者ら
＝燕市吉田大保町

ミーティング」だ。隔週1回、医師らと校長、教頭の約10人が顔を合わせ、支援の在り方や児童生徒の状況などを話し合う。

こうした活動は、児童生徒の実態と必要な対応についての深い理解につながり、牧野仁・小児科部長(46)は「学校と病院が一体となっている」と語る。

同校によると23年度の1学期、同校に転入する前と比べて出席率が向上したケースが目立った。森田校長は、心身に不調がある子どもが安心して通い、学べる学校の在り方を明らかにしていくことで「不登校問題の解決や、多様な児童生徒のための教育実現に向けた有用な情報にも結びつくのでは」とみる。

病院と連携 安心確保

ミーティングで情報共有

燕市の県立吉田特別支援学校(森田隆行校長)は、県立吉田病院の医師らとともに、心身に不調がある児童生徒が安心して通える環境づくりを進める。2023年度は校長と医師らが定期的に集まる機会も新たに設けた。情報共有を図りながら、一人一人のニーズに応じた指導や支援に力を入れる。

物内に設置された病弱特別支援学校。入院せずに、心療内科などで治療を受けながら通う児童生徒が多い。現在は約40人が在籍する。

同校は吉田病院と同じ建

同校では①医師らとの協働②教師間の共通理解③個々のニーズに応じた指導・支援の三つのキーワードで学校づくりに取り組む。医師らとの協働の一環として始めたのが「ランチタイム